ていた。

主要な仕事は、

村民の統制と保護

村民を代表して他村との交渉

領主への請願（一揆等のとき村人を代表して領主に請願する）

年貢、村入用の割当、納入

領主からの帳簿（文書）の伝達、願書の作成

村人相互の土地の移動

等であった。

そのため、当然ながら読み書き算用の能力が必要とされ、神職・僧侶と並ぶ地位にあった。

人数は一村一名が原則とされていたが、浦辺の庄屋の数は多いようである。

はまゆうの花　浜風に　砂をふむ

幸夫

表紙解説

伊能忠敬の第一次大分県下の測量着手は、文化七年（一八一〇）正月二十二日中津藩に始まり、宇佐を経て国東半島を巡り杵築・日出・別府・府内・佐賀関・臼杵・津久見と海岸部を測量、三月七日佐伯城下に着いている。途中臼杵領測量のとき、現在の津久見市堅浦にある海岸寺（当時は臼杵藩祈祷寺の一つで「寂光院」といっていた。）で中食をしたことが測量日記に残されている。

写真の石柱は、海岸寺裏の庭園にあり、穂の長さ一九六センチメートル、一辺二十七センチメートル角の灰石で造られ、五十一センチメートルの高さの台座の上に建てられている。右側面には

文化七庚午年二月　従者

坂部貞之丞（日記には「坂部貞兵衛」となっている。）

下河部政五郎

青木勝次郎　永井要助

門弟子四人　侍四人　家来五人

の陰刻がされている。（建立年不詳）

現住職の話によれば、寺には記録が何も残ってないが、伊能忠敬より銀一両の寄進があったと伝えられており、かなり潤沢な資金を用意していたのではないかと話していた。

いずれにしても人生五十年とされた時代の五十六歳から七十四歳で没する直前まで、およそ十八年間、日本全土を歩いて測量したその労苦の程は、想像を絶するものであったろう。あらためて、その偉大な業績と行動力・精神力に頭が下がるのみである。

（吉田　齊次郎）